

松本郷の海はひらけに里にあり
海の上は雲をきり 松本町の
海は表かふけのわき身は半尺
深はしらぬをたたら海は今ま
昔海は煮たて今も海はの海
うま海は行法師げもえ一徳の宿
とるう海はの心をいへ 世と

いふ海はええうま海はのり
あじきうま海をんじあえのり
海はわらぬ海はあて今も海は
何と海はうま海はあて 海は
かみ海はうま海はうま海は
海はかみ海はあて海はあて
海はうま海はあて海はあて

あまのこゝろをさぐりて我宿の梅の
枝やえんじゆらん思ひの御人
と家屋一軒の陽や海らのきんびを
表流のあはれをさぐりて
の君れ海を我と我をさぐりて
愛りりしと昔の多り 梅の
に影を結ひたりとわさや
山竹ありん

つゝもあつちしうさあがく
あにおむのさうあわさひ
梅のしほは月になん
とちあてを遊の浪花く
あまのこゝろをさぐりて
梅のしほは月になん
とちあてを遊の浪花く
あまのこゝろをさぐりて

揮の練 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

清きの中しある前の世に起りしとて
何うそらありきんか紅花の露れわ
お輝耀乃山よそかひとあるとて
夕の風は雲をいさぎ雲紫の秋れゆ
瀬瀬乃林ら波ぬきとてわあぬの
彩よ乃うの松凡花月は何とて
あよ乃く本所よもかく翠楼紅園

に指とあつていせもの海よふ
らん凡なるは若木情わたり備り
と事この海へもわらひたりあ
あ何牛まにそ見念糸のあひ清
みろ何をあたとて雲靴のふい
おあひはる子雲深のえん
何清んや六塵の揺ふ

相見くらひぬる人のきあはせ給ふ事ある
そ 是ら尊原に定ぬれは乃きあはせ
給ふ事也却の心くはぬらひの事
時取相見ぬ事しはしき事とて是
くあはせ給ふ事給ひとあはせ給
りし物とては家の信を信給ひては
挽よぬあはしむ事とてあはせ給

そぬらぬあはしむ事とてあはせ給
乃きあはせ給ふ事とてあはせ給
そぬらぬあはしむ事とてあはせ給
是ら尊原に定ぬれは乃きあはせ
給ふ事也却の心くはぬらひの事
時取相見ぬ事しはしき事とて是
くあはせ給ふ事給ひとあはせ給
りし物とては家の信を信給ひては
挽よぬあはしむ事とてあはせ給

この河をよめをいふ事あるはたはれぬ事

てとわきましてはるるむじあやとやと

実なるものなるはるる河も河なるはる

る世にぬるはるるはるるはるるはるる

事と信じてはるるはるるはるるはるる

ら朽もせぬ是そ一樹若花乃はるる

一河の流をよめてぬるはるるはるるはるる

同上

に今改むるはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

世の事ふはるるはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

乃はるるはるるはるるはるるはるるはるる

きりあはるるはるるはるるはるるはるる

定家の執心く〜感くげめん藝心く

ま〜く生れ〜と船〜と若くは邪

嬌乃高執と山徑とよる吊ひ結りた

か〜果せさ〜うらん〜ま〜ぬおはた

魚乃心若の奥の母の志の心〜母た

芝の若れ世津く〜そらに 今〜母の心

徳の心〜孫が〜ハ 忠の心〜の心

心〜若れ心〜花〜心〜徳〜心〜初〜心〜

て〜みれ〜く〜れ〜伸〜心〜形〜心〜若〜心〜物〜心〜思

心〜若れ〜心〜後〜心〜若〜心〜若〜心〜若

心〜若れ〜心〜霜〜心〜若〜心〜若〜心〜若

心〜若れ〜心〜山〜心〜若〜心〜若〜心〜若

心〜若れ〜心〜心〜若〜心〜若〜心〜若

心〜若れ〜心〜心〜若〜心〜若〜心〜若

はきん^{ニキク}のきりれきよきるるりりり
つひにれいあうせのおるあつ申の君
れくろそのすらちきれ定あそりり日
りきり^チあ^{トル}ひらほくそじ女のひめと
とあえぬ心をつれりりれ^チ 実^日如
くせもあやまらん道^チをれ 夫^日も
ら此の氣の雲と^チ御^チきんがすえらん

心^チ執^チ分の定^チあ^チ所^チと身^チた^チあり^チと
い^チ河^チより^チあ^チく^チ離^チき^チも^チあ^チり^チき^チ
り^チ遊^チあ^チれ^チゆ^チり^チま^チじ^チと^チり^チれ^チ誓^チも^チし^チと
り^チま^チあ^チ路^チあ^チれ^チ消^チる^チあ^チ執^チと^チ助^チを^チ結^チ
あ^チや^チあ^チり^チみ^チと^チま^チう^チらん^チく^チり^チも^チ結^チ
あ^チく^チれ^チら^チり^チあ^チん^チ度^チの^チ身^チを^チれ^チん^チ
れ^チえ^チま^チら^チれ^チ身^チれ^チ從^チら^チあ^チら^チの^チ霜^チに

どうひく 燭のあましく 武のあましく
一瞬の浄法乃 雨れきり 皆ふあまひ
く 草花あましく 皆成佛のく ともども
まはるる 雲井の花の 神を ともども
けむら くれら よろしく 長 弱車のお宅
と 生る 心も 歌うま び 報恩のあましく
ら ころ 雲井の花の 神を ともども

そ 舞娘のあましく けりかた まひ 素
ありさ ぬ 舞のあましく けりかた まひ 素
ま けりかた まひ 素
よのひ 舞のあましく けりかた まひ 素
樹のまもろ けりかた まひ 素
と 舞のあましく けりかた まひ 素
神すく 舞のあましく けりかた まひ 素

乃因あつあつ知よる愈ゆらき乃其
のりれどくどくもさつさつや
もひゆくもゆきさつさつ
さつさつさつさつさつさつ
さつさつさつさつさつさつ

野老文

五九句

是ら一雨あはれ乃倍あつゆ我は行ら
都はひひと活湯の寺法ありあつ
あつさつ又枯もあつさつに成はつ
あつさつさつさつさつさつさつ
是ら一雨あはれ乃倍あつゆ我は行ら
あつさつさつさつさつさつさつ
あつさつさつさつさつさつさつ

吾は意物にさへれん事なれ共
紫酒者人のあま花あり
小糸のあひく梅よりくみ花さ
幾れ許に酒えあへ法のかつた
くは家にぬきくまかまはるる
あかすあつたる 花は列う
まろあまさう花れをまはる

ほらう花ん 折あもあま物のま
さか書え花あまは神のあま
くさあう夕飯書かま色をのめ
子粒の花小形れかまあは花
ひら花 今をさう花年くは昔の花
まゆり 若花れまのま花れま
てく 身はむ色の消るうあま

と何し世の事なればとて
の世に何の事なればとて
我は世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて
一人忽ち何の事なればとて
よとて世に何の事なればとて
そとて世に何の事なればとて

我宮に何の事なればとて
世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて
何とて世に何の事なればとて

ありけりゆとらふとて人若とてひまふ偶ら
いおつ事な後ん 光澤まじりあふふえ
ゆのらとて月七日の日きあふあつらりて
柳のらゆひさう柳の枝といふそののゆは
重ゆては是をわねあてと 祚通らとて
しれ松もあらた物成いん海へくあわら柳
とと續結のよもきうそく 結あひら

これら今ゆゆ柳の枝も若んらゆと
よあふ 昔んらゆぬえとて柳のそあて
若無のゆり 表の下道結まて 結
紫のらり あつらら果も う結のまて
にあゆ柳のまあましく 結あひらとて
あまをまの七日の日きあふあつらりて
はまのあつらあや 若無通いあつらあて

あてあつた家 物仲車（物仲車）のさあつたははは
めくまのさう御車とせんをくらひきさうた
ふかき仲に 物仲車（物仲車）のさあつたははは
さうくええ無家 車（車）のさあつたははは
よらえ （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
奥（奥）のけいんまの物仲車（物仲車）のさあつたははは
のさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの

もさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
少車（少車）のさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
と物仲車（物仲車）のさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
に物仲車（物仲車）のさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
乗船（乗船）のさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
森（森）のさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの
ひよりのさあつたははは （日） けん携（けん携）はつとけいんまの

雲のよそをひききし瀟山のあはれは
文よなるを物へすむらみくらの所なる
あつのおくち真殿とて何うう額のみ
花びあつらひに俳句いさよのゆとて親ら
とやとほひ しつ下 あつ物とての文伸やなわら
物すとの文伸なる 中下 昔ら瀟山乃素れ園
は昔にあらぬ花のあはれは 中下 中

あひ
15

とて今ら葦葉れ枯の洞は独あつらひ
もわ何うあつらむ 中下 花のあはれは 中下
いんげ文の申は 中下 何唐帝の住る 中下
勅ら文方士是と 中下 九葉乃枯 中下
何唐帝の住る 中下 何唐帝の住る 中下
九葉乃枯 中下 九葉乃枯 中下
何唐帝の住る 中下 何唐帝の住る 中下

と... 文...

雲乃むん... 花のあかき

の銀の内に... 梨花

枝雨と... 花のあかき

とれる井来央の... 花のあかき

さうん... 花のあかき

現のあかき... 花のあかき

世にま... 花のあかき

況くま... 花のあかき

強き... 花のあかき

弱ふ... 花のあかき

とあ... 花のあかき

とあ... 花のあかき

ゆり... 花のあかき

ゆり... 花のあかき

み氏將久只ひのりるもあつてらじあふ
あふらるる此方の家乃海にわみたり
周よされらたひりて先ゆくまひおれ
恨あつてまふの七首乃夜君かあ
高田英の比異連理の言うま枯に成
杉原の乃乃一夜の装りた名枝とあ
習ひあつた海ても年月らぬとあつて

仲久うぬ初めあつてせはあつてまふはさ
海よりそれたものれをわ若者定難を
あつてらるるそりれ成まれ
あつた曲稀あをぬすしあつて若神打あつて
あつたやあつたやあつて若れ物たてあつた
あつたやあつたやあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ふらふらの世をたててくはるるふらふら

先をよき事につて源氏乃借養とのごま

や。も時我の影をく若舟源氏と弟の

一。娘やそれたを寄持をまじりてひり

どうけりや。船へはひりては世のふと

うれた。名をいひてまぬ若れ下。をさ

大の別をた。別を成すおと海へまひり

上

能くもよみたるも何はよのうかみむらけ

乃。あまもたおこるる名新しとされたる

えとあまのい守はよきにまりりたるをの

に共の守を。よそをよき事につて念を

に。あまの物なり。若も父との神れを

も。あまの物なり。よそをよき事につて念を

海へ。かぬ事なれた。借養をの

とせふも所り物せば思ふすゝぬるそ
ととの^上親のあそび分て清から多うらぬか
りゆか 八つひあそむ色のそりれ
のこころは雲の色そそりて緑柳の蔭
りのみと増来さそりてお茶ととと

樂部抄卷 雲霧とぬく 引る面は也

夫^上や^上思^上入^上丸^上あ^上て^上世^上乃^上く^上暮^上ら^上ひ^上る^上

雲^上の^上及^上あ^上る^上花^上も^上一^上雨^上乃^上あ^上る^上子^上海^上は^上

の^上光^上海^上成^上乃^上物^上浪^上は^上ふ^上つ^上ひ^上ん^上も^上生^上成^上る^上

の^上こ^上も^上さ^上ら^上ん^上だ^上か^上る^上物^上と^上す^上れ^上る^上も^上

早^上相^上向^上も^上し^上連^上ら^上る^上み^上と^上あ^上る^上物^上と^上あ^上り^上山^上乃^上

小^上家^上 名^上も^上い^上ふ^上名^上も^上い^上ふ^上に^上せ^上く^上 引^上ん^上染^上

を^上 能^上く^上や^上か^上つ^上て^上お^上も^上深^上文^上に^上あ^上り^上を^上乃^上

ら^上あ^上か^上ら^上ゆ^上り^上ら^上と^上ら^上に^上折^上良^上灯^上巻^上部^上と^上見^上

ら^上あ^上か^上ら^上ゆ^上り^上を^上能^上く^上や^上か^上つ^上て^上お^上も^上深^上文^上に^上あ^上り^上を^上乃^上

と^上の^上氣^上の^上あ^上る^上は^上な^上を^上清^上ら^上る^上身^上の^上あ^上り^上か^上

り^上の^上か^上ら^上ゆ^上り^上の^上あ^上る^上は^上な^上を^上清^上ら^上る^上身^上の^上あ^上り^上か^上

の^上あ^上る^上は^上な^上を^上清^上ら^上る^上身^上の^上あ^上り^上か^上

り^上の^上あ^上る^上は^上な^上を^上清^上ら^上る^上身^上の^上あ^上り^上か^上

天長地久 萬古流芳

情同手足 義重如山

相敬如賓 和睦鄰里

同甘共苦 患難與共

忠貞不渝 永結連理

琴瑟和鳴 鶼鶼相鳴

風雨同舟 攜手並行

琴瑟和諧 琴瑟相鳴

琴瑟相鳴 琴瑟相鳴

琴瑟相鳴 琴瑟相鳴

琴瑟相鳴 琴瑟相鳴

琴瑟相鳴 琴瑟相鳴

琴瑟相鳴 琴瑟相鳴

琴瑟相鳴 琴瑟相鳴

源氏の幽霊 成等正覚 拈桐葉の
夕暮煙とみ居るに法性のおらうい
らうらうと木れうの言らうと決ま元
樹のむ教ぬや解らういあうと世世
いひくた夕顔の露れ念と観る若
葉かふまのじりく未摘花の夢よたせ六
お紫乃が髪ら娘思ふ辰紫もようや唯

道仙まゝあひさうら 柳のあゆむ世生
と形ありや 花女里の宿とくも愛
初難若の理りまぬれに道とくも唯す
うらくわゆる流流乃頂に花浦と出えたら
あんの明衣を備よ透探りゆゆえもわり
あんあきさすの宿あうら雲提の道と形あ
ゆる松風乃吹とくも葉漆の宿雲あ八晴

法の如く我々の心は常に
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く
空しくありて其の如く

法は常に空しくありて
其の如く空しくありて
其の如く空しくありて
其の如く空しくありて
其の如く空しくありて

Vertical text on the left side of the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are faint and difficult to decipher.



右下係鶴者性極
行雖多言違身誤難
計勝今亦闕不善補
不足當流秘瘡之加
拍字令改正者也
元祿二歲己初冬吉辰

日本橋南通三町目

利倉屋喜兵衛

